

「前回の議論の整理」の事務局問題提起について

全日本手をつなぐ育成会 常務理事 田中正博

【アール・ブリュットという呼称について】

アールブリュットの言葉を巡る論点整理の漏れについて

前回の検討会議で日比野構成員から

「アールブリュット的な視点とか価値観とか関係性とか言うものに対して気になっている。本能的にアールブリュットが欲しい、世界観に本能的に興味を示している時代だと思う。」と言う発言が有り、それを受けて

青柳座長からは、

「先ほどアールブリュットなどのときにコロニアルという言葉が出てき、日比野さんの話などによるとアールブリュットを取り込んだ芸術館をつくることによって、芸術の範囲が広がったり深まったりすると言う意味で、決して一方的にコロニアルなものではないという意識を共有していると思う。」

と発言がされ、私としては、前回の会議の論点として

○ 「アール・ブリュット」という言葉は、国際的にも認知されており、芸術の枠組みを広げたり、深めたりする作用も期待できる等の意見があり「アール・ブリュット」という言葉を使用することで結論を得たい。

と言う論点を盛り込んでいただきたい。

【「前回の議論の整理」資料2の事務局の問題提起部分への意見】

資料には、「ナショナルセンターについては、現時点では、その概念について共通の認識が形成されておらず、障害者の芸術活動への支援の取組を進めていく中で、関係者の間で更に議論を行うこととしてはどうか。」とありますが、前回の会議では、ナショナルセンターに関する具体的なイメージが議論され、共有できた部分も多くあったと認識していましたので違和感を覚えます。

前回の会議の中でもお伝えしたとおり、全日本育成会としてもナショナルセンターの設置という背骨のある支援が必要であると考えておりますので、前回の懇談会での議論を踏まえた上で、ナショナルセンターのあり方について提案します。

1. ナショナルセンターの理想モデルについて

保坂構成員や日比野構成員の発言にもありましたとおり、アール・ブリュットの面白さの一つは、それが地域にあるものだということです。国の拠点施設として大きなハコモノを1ヶ所設置して、そこにすべてを集中するのではなく、地域に根差した活動をしている地域の美術館や施設を国が支援（展示空間の増築や専門職員の配置にかかる補助等）するというような弾力性をもってナショナルセンター、ひいてはナショナルセンター機能

を考える必要があります。

2. ナショナルセンターの機能について

障害のある人の芸術活動を支援するナショナルセンターに必要な機能は、以下の通りです。

- (1) 美術館機能
 - ①アール・ブリュット作品の調査・評価
 - ②アール・ブリュット作品の収集・保管・展示
- (2) 人材育成機能
 - ①作品の評価、発信を行う人材の育成
 - ②障害者の芸術活動を支える人材の育成
- (3) 交流支援機能
 - ①造形活動を支える福祉施設等のネットワーク構築
 - ②芸術分野の人材と医療・福祉現場との出会い促進
- (4) 相談支援機能
 - ①造形活動や展示機会等に関する情報提供
 - ②作者の権利に関する情報提供・啓発

上記の機能のうち、作品の調査や評価については、美術館の学芸員だけが評価するのではなく、作品が生み出される現場をよく知っている福祉や医療の関係者等さまざまな人も一緒に調査して評価を練り上げていく枠組みとすることが重要と考えます。

3. 展示や研究等の担い手について

事務局の問題提起を読むと、ナショナルセンターの整備よりも展示や研究等の担い手の育成を図ることを優先しているように見えますが、展示や研究を実践できるフィールドを整備することなしに、人材の育成を図ることは難しいと考えます。

既にいくつかの国公立美術館等にアール・ブリュットに関心を抱く学芸員が存在することは、平成24年度のボーダレス・アートミュージアムN O-M Aの作品調査においても4人の学芸員(※)が参加していることから明らかです。関心を持ちながら活躍できる場が無い学芸員等が一定存在することが予想されます。まずは、拠点を整備し、その取り組みの中で人材を掘り起し、実践の場で育成することが求められます。

※「滋賀県アール・ブリュット推進事業 全国・アジア地域作品調査研究平成24年度報告書」(第1回懇談会配布資料)